

○食事の訓練

何處のお子様でも最も六ヶしい八ヶましいのは食事の事でありませう、日に三度〳〵繰り返す食事の都度、いやあれは嫌だ之れは好き、お菜が少ないとか、不味などが、實に際限もなく苦情の出る事があります、又其の作法につきましても、小さな手で食べるのでありますから無理もありませんが、よくコボスのであります、甚しい時には雪でも降つた様眞白にバラ〳〵とコボして居る事もありません、或は箸を投げる、茶碗を破す、お皿を投げる、汁をコボスといふ亂暴が演出されないとも限りません、ソコで食事の訓練は大切だから、一つ氣を付けよとの主人からの注意も御座いますし旁々私も氣がつかないでもありませんから、以前より一層の注意を拂ひました。先づ食卓につかせ食事をさせます時には、姿勢を正し、挨拶(頂きます)をさせまして、始めさせます、よく咀嚼

する様常に訓戒を怠りません上に、コボサヌ様に〳〵と申しますが中々コボサヌ様に頂けぬので、私は或時不剛思ひついて懸賞制度を設けました、勿論大きな子はコボシませんが此の懸賞に入れないで、小さい三人が一粒もコボサヌならば、菓子なり玩具なりを與へる規約をしました、サー子供は大變コボサヌ〳〵ソレコボレルと賞が頂かれぬと一生懸命氣を付ました、其の爲め餘程コボス分量が減りました、しかし全くコボサヌ様にはまだなれません、ソレカラ時に一粒の御飯も百姓が粒々辛苦の結果なる事を話し聞かせ、或は米についての話、或は米の出来る稻の事、或は百姓の辛苦など話しますと、少し大きな子は、非常な興味を以て、聞きながら食事をいたします、又或は昔流の餘り御飯をコボスと眼が潰れるとか、おからをコボスと長者になれぬとか、祖母から聞かされた事を話す事も、極會にありました、其れについて面白い事があります。

いつで御座いましたか、五歳の女兒を連れまして學校の校友會に参りました節、餘興として彈琴の催しがありました、其の琴の師匠が盲目で御座います一生態命君が代を奏して、會員は片唾を呑んで聞いて居りました、一坐しんとして咳聲さへ聞えませんが、時に遙か會場の先の方の椅子に腰を掛けさせておきました幼女が何を思ひ出しましたか、サシ足ヌキ足で、私の所に参り、何か語らうとしますから、耳をかせますと、母さんあの人は御飯をコボシタのねーと申します、おとなりに居られる會員の耳に入つた人々は袖を口にあて、眞赤になつて笑つておいで、した。

實に子供に申します事はいつ何處で、何んな風にあらはれる事やら分りませんから、注意が大事だと存じました。

マー食事の作法につきまして、今迄成功しましたのは、口で訓戒するよりか、この懸賞方法が有効

かと存じます。

其れから食物の善惡好否等について、最も注意を要します事は、子供は何でも新しい物に接する毎に、一種の好奇心を以て之を知らうといたします、魚にしても、野菜にしても、豆腐にしても、卵にしても、子供の心に及びました事は、ズン／＼質問いたします、或時は其の代價を聞く事もありま、或る時は品質の善惡を聞く事もありま、或る時は滋養か否かと聞く事もありま、或る時は料理の仕方を知りたくありま、其の雑多なる質問に應ずる時に毎に注意を要しますのは、無論子供の方から尋ねる程の事ならば、子供に分る程度に於て知らせるは必要の事と存じますが、其の知らせ方が下手だと子供が下品に流れ易いのであります、餘り下品になりますと、其の品性を傷けます様に思はれます、なせならば餘りに食物の善惡好否を知悉いたしますと、子供は只自己に都合のよいものばかりをほしがります、都合のよいもの

ばかりほしがる結果は或は幼少なものの分まで、すかして取り上げます、取り上げられたる幼児は又其の兄姉の眞似をする様になります、そこで一種厭ふべき風儀が醸されます、若し最初に於て、之を防ぎますれば、其の害は少ないで御座います、うが、只子供のする事であるから、何でもない位に看過いたしますと、或は將來災となる事がないとも申されませんが、そこで子供の質問に應じて食物の如何を知らせると同時に母親は子供の徳育について並進せしめなければなりません、如何に自己の好きな物でも、他人の所有物には一切手をふる、事が出来ないものであるといふ事を深く胸に刻ませておかないと子供心に只其の慾望を充たしたさに不徳な事を犯すのであります、所が餘り人の品に手をふれるなど、固く訓練いたしますと自己のものを他の人に與へるといふ事が出来にくくなり、之と同時に、人の困つて居る時に之に物を與へるとか、或は貸すとかの餘

裕ある心を持たせる事が大切で御座います。要するに子供の食事についての訓練は、姿勢を正し、よく咀嚼して、コボサエ様、膳に上る物品についての智識を與ふる時餘りに下品にならぬ様注意が肝要かと存じます。

外へ外へ (四)

○子どもを自然に接せしめよといふは、言ふ迄もなく花見遊散の意味ではない。又必ずしも名勝見物の意味でもない。もつと眞面目に、もつと謙遜に、自然の表面の美を樂しむばかりでなく、自然そのものの眞率な感化を得させよといふ意味である。名所へゆかねば風景がない、自然の享樂がないと思ふのは世に心なき人々のことである。心ありて見れば一々花を名所に訪ふ必要もない。春光四隅に充ち溢れて。行く處として居る處として春興ゆたかならぬはない。たゞ閉ぢこもりてのみ、我れから自然に背けば、自然も我れに背くのである子どもに自然を興ふるも亦然り。草のある處、日のあたる處即ち愉よろし。何も自然といへば直ぐ景勝のことのみ解してはならぬ。